

「千葉氏を語る」だより

年頭の挨拶



会長 向後保雄

会員の皆様、明けましておめでとう
ございます。今年は元日から穏やかな
正月を迎えています。

テレビを見ると全国の神社・仏閣は
多くの初詣での人々で賑わっている
場面が目に見え込んでまいります。

私も家族とともに寒川神社に初詣
でに参り、一年の息災を祈願した次第
でございます。

さて、本年は千葉市開府の豪族千葉
氏が千葉の亥鼻山に移住してから八
九〇年目に当たります。

本会としても千葉氏に関する講演
会やシンポジウム、関係史跡の見学会
など積極的に開催し、千葉市民の千葉
氏に対するアイデンティティの構築
に向けて活動していきたいと思っ
ている次第でございます。

平成 27 年度
創刊号
発行・編集
千葉氏を語る会事務局
発行日
平成 28 年 2 月 22 日



向後会長

今後もご支援のほどお願い申し上
げて私の新年の挨拶といたしたいと
思います。

発会式報告

昨年十一月十四日(土)午後六時
十五分より千葉市文化センターセミ
ナー室で「千葉氏を語る会」発会式と
講演会・シンポジウムが開かれました
ので報告します。

発会式は鷲見副会長の開会の言葉
から始まり、向後会長の挨拶に続いて
来賓として衆議院議員門山哲夫氏の
代理片山哲生氏・市議員三瓶輝枝
氏・同小川智之氏、千葉日報萩原博社
長・千葉港ロータリークラブ岩澤和夫
氏、千葉市政策調整課長折原亮氏の挨



三瓶議員
を
する
挨拶

せていただきました。

この他、来賓の方々には市議会副議長長白
鳥誠氏、県会議員宍倉登氏・同田村耕
作氏、同塚定良次氏。同藤井弘之氏、
同網中肇氏、
同市議員森山
和博氏の各氏
でした。



小川議員
を
する
挨拶

続いて発会式に移りまして当会役
員の紹介と活動方針が提案され、採択
されて閉会となりました。

◆主な活動

- ① 講演会・シンポジウムの開催
- ② 学習会・現地見学会の開催
- ③ 機関紙(年一回)・会報(新春・春・秋の三回)の発行。
- ④ その他、千葉氏関係行事の開催

◆役員

- 会長 向後保雄
- 副会長 鷲見隆仁(組織・会計担当)
- 同 丸井敬司(企画・広報担当)
- 理事
- 同 秋野林洋
- 同 石橋通男

同 江波戸弘安

同 恩田英熙

同 鈴木義雄

同 高野利太郎

同 武山忠孝

同 長谷川幸雄

同 平山健治

同 榊井明光

同 宮本明正

同 山内博

同 山下護

同 仙石守

◆事務局

局長 日向安昭

◆学術顧問

最高学術顧問 川村優

学術顧問 段木一行

同 丸井敬司(副会長と兼務)



講演会・シンポジウムの報告

十一月十四日午後七時より千葉市
文化センターセミナー室において講
演会・シンポジウムが開催されました。

◆第一部 基調講演

基調講演につきましては吉野秀
夫氏に「『君待橋伝承』が語る古代
千葉市の景観」丸井敬司氏には「千
葉市内における頼朝伝承の史的考
察」君待橋伝承・お茶の水伝承・



吉野秀夫氏

白旗伝承など「」について話していただきました。

吉野氏の講演につきましては池田の池の生成と猪鼻山下にかつて存在した君待橋に関わる三つの伝承に関して講演がありました。

この一話目は、千葉町に住む若者と寒川に住む若い乙女の悲恋物語。続いて藤原実方と清少納言の遣り取りと君待橋伝承に関して話していただきました。



丸井敬司氏

一方、丸井氏の講演は千葉市内に伝承された頼朝伝承に関するもので、治承四年（一一八〇年）伊豆で挙兵し、相模の石橋山の戦いに敗れて安房に逃れた頼朝が安房から旧東海道を通って上総国府から千葉に至った経緯と千葉市内に残る①頼朝の尊光院（現千葉神社）の参詣伝承、②お茶の水伝承、③白幡伝承などの頼朝伝承の史的意義についてお話をいただきました。

第二部 シンポジウム

このシンポジウムの最大のテーマは、頼朝が安房から下総国府に至るルート上の説明でした。これについては、「古代の房総の道」に詳しい元早稲田大学講師の佐々木氏に律令時代の東海道の説明をしていただきました。

佐々木氏のお話の要旨は①古代東

海道の変遷の歴史と駅舎、②『更級日記』の作者菅原孝標の娘一行の通った東海道の路線などの後、安房から下総国府に至る頼朝が通ったルートのお話をいただきました。

ここでは佐々木氏は、頼朝の通った道は古代の東海道であるとされましたが、この理由として①用心深い頼朝は安全性という観点から律令時代の東海道を選んだ。②当時もつとも整備された道であった。というものです。

用心深い頼朝が内陸部からの攻撃に対して海上に逃れることができるという点で内陸部の他の道路よりも優れていることによるものです。



佐々木虔氏

また、頼朝の兵は安房を出発した時点では少数でしたが、千葉に到着するこ

ろには数千人の兵力に膨れ上がっていったことが知られています。とすると

これらの兵たちが通過できる道は当時、整備された東海道しか考えられないとのことでした。

佐々木氏は、その時、頼朝を支えていたのが、安西氏や三浦氏、千葉氏などの水軍という考え方を示されています。

なお、この中で、佐々木氏は千葉市内の東海道の内、宮崎町から千葉寺下までの約四百mの間は全国的に見ても当時の東海道の景観を最もよく残している部分と指摘されました。東京都では旧東海道を歴史の道として整備し、案内板を立てていますが、千葉市でもまだ、この雰囲気が残っている内に整備をする必要性を強調されていました。

さて、ここでは吉野氏が千葉寺の縁起の話から古代千葉ではオーロラが観測されていた可能性が高いことを指摘され、これが千葉の天女伝説である「羽衣伝承」に繋がったことを指摘されました。

続いて君待橋伝承に当時あった君待橋の場所については東海道が都川を渡る現在の吾妻橋か大和橋であろうとしました。

続いて千葉氏の館の位置の問題に移りました。

これについて吉野氏は、元結城浜浦（潟湖）に接する低湿地に造られた裁判所敷地は立地条件から考えて中世武士団の本拠地とは考えられないことを指摘され、千葉氏が千葉に内部した古代末期の千葉館は猪鼻山とした方が妥当とする説明がありました。

一方、丸井氏は裁判所敷地には土塁はあるが堀の痕跡はなく、この場所が『千学集抜粹』に登場する堀内とは有り得ないことをお話になりました。また、猪鼻山山頂から出土した平安末期の褐釉四耳壺や古瀬戸四耳壺が千葉氏当主クラスの可能性が高く、当時の武士の慣習から、これらの墓に隣接してその館や城が存在した可能性を述べられました。

また、ここに千葉館が存在したことについては『源平闘諍録』や『千学集抜粹』など古文書や文献からも確認できることも指摘されています。

最後にコーディネーターより佐々木氏から指摘された歴史の道構想と丸井氏から指摘された猪鼻山山頂付近から出土した褐釉四耳壺や古瀬戸四耳壺などの人骨の調査やDNA鑑定を必要性を千葉市長や千葉市教育委員会に提言することで終了しました（事務局）。



シリーズ県外千葉氏

◆美濃東氏

千葉一族の東氏は常胤の六男で、元々は千葉市内に所領を与えられていましたが、父常胤が頼朝より、下総国内の所領を安堵されると父常胤よりこの内香取郡の木内・立花庄(後の東庄)や海上郡の三崎庄等を与えられました。

東一族は当初、この地区を所

領としていましたが、幕府と朝廷の本格的な衝突となった承久の変の功績

で、美濃国郡上



東常縁画像

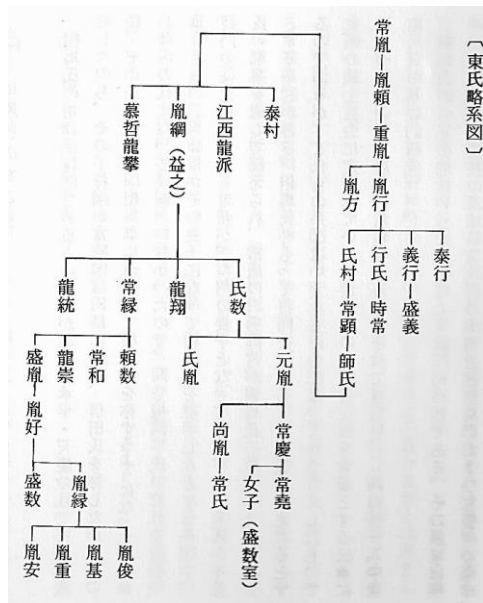
郡山田庄を獲得した。その後、この一族は胤行の代で

郡上に移住し、

下総に残った東氏一族の海上氏と美濃東氏に分かれました。

海上氏は主に千葉氏の傘下の有力

武士団として戦国時代まで活躍します。一方、美濃国郡上郡に移住した東本宗家は、室町時代は幕府奉公衆として活躍しました。また、山田の庄内の



篠脇城を拠点として美濃国の北西部一帯で勢力を振るいました。

常縁の代で、下総国で享徳の乱がおき、千葉胤直が一族の馬加康胤や家臣の原胤房に討たれると美濃の兵を率いて下総に出陣しました。

常縁は当初、上総の八幡で康胤の軍を敗ぶり、戦いを優位に進めますが、この戦いの最中に常縁の居城であった郡上の篠脇城が美濃国守護代斎藤妙椿に奪われると美濃に引き上げたため、下総の戦いは膠着状況となりました。

さて、常縁は有能な武将でありましたが、歌人としても二条派歌学の正説を伝えた人物として知られています。連歌師宗祇に古今伝授したことは有名です。歌集には『常縁集』、

歌学書には『東野州聞書』があります。

この一族は戦国時代になると衰え、東氏は一族の遠藤氏によって亡ぼされますが、遠藤氏は織田信長。豊臣秀吉。徳川家康などに仕え、江戸時代は郡上八幡城を拠点として三万石の名として再出発しました。後に近江の三上に移封となります(丸井)。



千九曜紋について

この紋は中心を半月とし、周りに九つの星を配した紋です。星の数は半月を含めて十つの星で構成されています。『源平闘諍録』ではこれを「千九曜紋」とした上で、「今の世では月星紋と号する」としており、この資料の元となった「妙見説話」の成立した十二世紀の中頃、つまり、鎌倉時代の中頃にはこの紋が、月星紋と呼ばれていたことが確認されます。今の月星紋(三日月と一つ星)が現れる中世の末頃まで全国の千葉氏が使っていた紋でした。



「お茶の歴史」茶大百科より 千葉氏を語る会

榊井明光

栄西説から行賀説へ

従来、茶樹は日本に自生していたという説もありますが、DNA鑑定の結果、現在では自生説は否定されています。

正倉院文書と平城宮跡から出土する木簡に『茶』と書かれている食品がある。これが『茶Cha2』であるか

どうかは議論が分かれていて定説はない。奈良興福寺一乗院跡から緑釉陶器の風炉と釜・茶碗が出土している、これは九七〇年頃に創建された遺構よりも下層から、奈良時代末期の土坑から出土した。これらは喫茶用具と考えられている。日本へ茶を伝えた注目の人、それは興福寺の入唐僧・行賀(七二九〜八〇三)が今一番怪しいとされていますが、状況証拠ばかりで、奈良県警は出入国動植物検疫法違反で書類送検するにはいたっていない。しかし、限りなく『茶』は奈良時代末期に日本へやってきた可能性が高い。

喫茶用具と考えられるものは平安時代初期のものとして大津市崇福寺跡、

京都府山城国国府跡からも出土している。弘仁年間（八一〇〜八二四）に編纂された書物には唐風の餅茶を炙り搗き砕き細かくして茶を喫した風景が描かれている。

日本の茶の歴史上で重要な出来事、それは嵯峨天皇によつて起こされた。「日本後紀」という書物に登場します。

弘仁六年（八一五）、四月、嵯峨天皇が近江国韓崎に行幸した際、梵釈寺で崇福寺の僧永忠が茶を煎じ奉じた。この永

忠は三〇年間唐にいて延暦二四年（八〇五）に空海とともに帰つて来た人です。

さらにその年の六月、大和・山城・摂津・河内・近江・丹波・播磨など畿内周辺各国に茶を植えさせ、毎年献上するように命じました。このあたりは「Wikipedia」にも詳しく出ています。そこでこれが日本の記録に現れる最初の茶事である、とか最澄や空海が茶の種を持ち帰り貴族や僧侶の間で喫茶の習慣が日本に伝わったとする説があります。

しかしチョット待って下さい。この前年弘仁五年（八一四）にも嵯峨天皇は藤原冬嗣の閑院を訪れて茶を喫した記録もあります。弘仁六年当時には既に諸国

に植えさせるほどの茶の実が調つていたことを示しています。すでに茶樹は存在し、各地に製茶法も伝えられていたことを示すものです。最澄や空海や永忠が茶を飲んだ記録はありますが、彼らを茶の伝来者とするにはムリが多いです。むしろそれ以前、奈良興福寺などで習慣があり、その前提があつたからこそ弘仁六年の諸国への殖茶ではなかつたか、そう考えるのが徐々に一般化しているようです。

菅原道真は延喜元年（九〇一）に大宰府へ左遷させられましたが、菅家後集に起飲茶一盞（朝起きたらすぐに茶を飲む）という様子ですから相当に習慣化していたと考えるべきでしょう。宮中では春秋年二回、緒大寺の僧侶百人を宮中に招いて国家の安泰を祈願する季御読経が行われましたが、その際に『引茶』という法会の疲労を癒す飲み物が提供されていました。その他にも宮中での行事には茶が出され僧侶たちの世界にも茶を飲んでいただくことが認められます。

さらに茶の大衆化を思わせる記録があります。それは『茶染』です。茶

は染料としても使われます。飲料の茶葉を摘んだあとに古葉を煮出して、つまり番茶の起源が平安時代まで遡ることが指摘されるようになりました。保元二年（一一五七）兵範記・茶染狩襖袴・茶染立烏帽子など。頼朝さんと常胤さんが飲んだお茶は高級茶と思いますが、番茶だった可能性も出てきた訳です。伊藤園のおーいお茶ではないと思えます。



今後の予定

◆三月十五日（火）

「池田の池」講義。講師（吉野秀夫氏）

・時間 午後一時半より

・会場 「きぼーる」十一階、千葉市社

会福祉協議会ボランティアセン

ター会議室

◆三月二六日（土）

「池田の池」見学会

・集合 午前九時、JR千葉駅東口

・講師 吉野秀夫氏

◆申込 日向：090-8305-6601

募集中

◆「千葉氏を語る会」では、会員を募集しています。

◆会費 年間二千元

◆活動 千葉氏に関する講演会・シンポジウム。学習会・現地見学会、

◆発行 機関紙「千葉氏を語る」と会報「千葉氏を語るだより」。

◆連絡先 日向

090-8305-6601

編集後記

編集子

この度私達待望の会報「千葉氏を語る」だよりが発行されることとなりました。今年、千葉開府八九〇年の年です。これを機会に先祖が千葉を本拠地として千葉氏を名乗り五〇〇年あまりの間その一族が繁栄して各地にその子孫が活躍し現在でも千葉氏の功績を引き継ぎ、伝説、伝統そして民族行事を伝えています。本家千葉に於いてもその歴史を学び、発展させたいと思います。この小さな会報がその一助となるよう願っている次第です。